

Medication Adherence among Colorectal Cancer Patients Receiving Postoperative Adjuvant Chemotherapy: A Longitudinal Study

永松, 有紀

<https://doi.org/10.15017/2534384>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名	永松 有紀			
論 文 名	Medication adherence among colorectal cancer patients receiving postoperative adjuvant chemotherapy: A longitudinal study (術後補助化学療法中の大腸がん患者の服薬アドヒアランスに関する縦断調査)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	中尾 久子
	副 査	九州大学	教授	藤田 君支
	副 査	九州大学	教授	橋口 暢子

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

大腸がんの術後補助療法として経口抗がん剤を使用した療法は標準治療の一つとなっているが、日本において経口抗がん剤単独治療を用いた術後補助化学療法の中の服薬アドヒアランスに関する報告は少ない。

本研究は経口抗がん剤を使用する術後補助化学療法を受ける大腸がん患者の服薬アドヒアランスの実態と服薬アドヒアランスの低下に関連する要因を明らかにすることを目的に、治療開始から 3 時点 (1-2、3-4、5-6 か月) で無記名自記式質問紙による調査を行った。61 名の患者 (経口抗がん剤単独群 33 名、経口抗がん剤と静注薬併用群 28 名) を対象とした。服薬アドヒアランスは MMAS-8 (Morisky Medication Adherence Scale-8)、不安と抑うつは HADS (Hospital Anxiety and Depression Scale) の日本語版を使用し、服薬アドヒアランス低下に関連する要因の解析はロジスティック回帰分析を使用した。

分析の結果、治療期間中の服薬アドヒアランスや不安と抑うつは経時的に有意な変化はなかった。服薬アドヒアランスの低下に関連する要因は、治療開始 1-2 か月は経口抗がん剤単独による治療 (OR: 9.49) と抑うつ (OR: 1.30) であった。治療開始 5-6 か月は経口抗がん剤単独治療 (OR: 6.39) が関与していた。経口抗がん剤単独治療群のレジメンは内服方法が複雑であること、また、経口抗がん剤単独治療群は、経口抗がん剤と静注薬併用群と比較して医療者と接する時間が短く、コミュニケーションによる情報収集や相談の機会が少ないことが、アドヒアランスの低下に影響していることが示唆された。

以上の結果より、服薬アドヒアランスの低下に関連する要因が明らかになった。リスクが高い経口抗がん剤単独治療や抑うつ状態に焦点を当て、医療者が治療開始初期から継続的に術後補助療法中への大腸がん患者に教育的、精神的な支援を行う必要性と意義を示した本研究の意義は高い。

審査を行い、研究の位置づけ、関連する研究、研究に関する考察を確認し、概ね適切な回答を得たので、主査および副査にて協議を行い、本論文が博士 (看護学) の学位に十分に値するものであると認めた。

令和 元 年 6 月 26 日

主査 中尾 久子
副査 藤田 君支
副査 橋口 暢子